宇治拾遺物語
古今著聞集

校註

日本文學大系

第十卷

大正十五年九月二十五日印刷
大正十五年九月二十八日發行

日本文學大系
第十卷

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
右代表者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番　二一八八番
振替東京五二二九八番

解題

宇治拾遺物語

文學博士　尾上八郎

韻文から始まる文學、殊にわが國のそれに於いて、歌物語の古くからあるのは、自然の事である。記、紀、萬葉、風土記等に、記載せられてある多くのそれらが、ことに鮮やかに且快く我等の目に映ずる。假名が自由に使用せられる事となると、この物語は急に發展して、趣向を凝らし、想像を廻らして、平安朝の盛時には、源氏物語の如き大作が出來上つた。併し、かくの如くに到ると、空想的產物で殆んど事實に卽せぬものとなつたのであるから、事實を傳へた歌物語とは、おのづから系統を異にする趣を生じた。而して、これが大いに榮えたのであるから、本流が枯渴に近づいて、旁流が汪溢した形を見せてゐるが、事實は事實として存在するのみならず、時と共にいよ〳〵增加して來るのである。これも亦、備忘上或は趣味上捨て難いものであるから、この

輯錄は、源氏物語以後に於いて、歴史物語等に明らかに見られるのである。しかし、また別に、外來的說話と混合して記載せられてもゐる。今昔物語の一部がそれであると共に、それに倣つた本書の一部が、またそれである。

しかし、本書の主とする所は、以上と聊か異なつてゐる。それは、單なる事實ならずして宗教に聯關したものである。古來歌がある一方に、宗教があつた。宗教心の發生は極めて古い。神祇傳說の多くは、語部によつて、神嚴的にも、幽怪的にも語り傳へられた。これらが、記、紀その他に載錄せられた頃には、既に佛教の廣布があつた。異邦的趣味が時人の好奇心を煽つたのと、優秀國人が崇敬してゐるのと、從來のよりも、一層幽玄で、森奥であるのとで、尊信の念は盛んになり、これに關する傳說の多くがおのづから發生した。これらの輯錄が種々出來たが、平安朝に入つて、日本國現報善惡靈異記のやうな類も現はれた。これらを襲ふものは、續出したが、そのことに浩瀚なものに、今昔物語がある。大きさは頗る異なるが、それを承けたのに本書があるのである。

膂力のある者、膽氣のある者は、何時の代にも重んぜられる。超自然的のものにも畏怖せず、よく自己を守るのみならず、他の多數の人々をも守るのは、英雄的所業の著しいものである。こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れらの記載は、猶記紀その他に異彩を放つてゐる。平安朝に入つて、公卿が衰へかゝつて、武家が勃興の勢を示して來ると、特に目立つて、劍戟弓馬の間に於けるこの類の說話が、また趣味深く聞かれる事となつた。故に力を以て萬事を解決する時代になると、軍記物語の發生を見るのであるが、その以前に、既に今昔物語に多くの記載があり、而してこれが本書に傳はつて居る。

童話の愛好は、人が少年時代をもつと共に、また何時の代にもある。例の記、紀、風土記等にある事は、何人も知悉してゐる。しかし、物語が發達して成人の戀愛談が全體を被ふとなると、この類の說話は、おのづから等閑に附せられた。しかし、少年に興味が多いとともに、成人にもまた情味の深い小話は、輯錄するに足る價値を發見せられて、今昔物語に、その多くを揭載してゐる。それに倣つた本書が、その後を繼いでゐるのは、自然の成行であらねばならぬ。

敎化訓練は、社會組織の上に於いて、何時も必要である。諸傳說の輯錄の目的も、時には記憶が中心であり、或は興味が基礎となるが、訓戒が主要となつてゐる場合が多い。ことに佛敎が大いに行はれ、また漢學が盛んになると、敎訓的要素を多分に含んでゐるそれらの爲に、傳說の記述者の筆は、おのづからその方面に曲げられて來る。平安朝末期に至ると、佛敎に新意義が加はつて、著しい勢力を一般に得て來たと共に、この傾向は極めて露骨に現はれた。今昔物語中の傳

說も、すでにこれが多い。これに次いだ本書は、またこれの多くを藏してゐる。しかして、鎌倉幕府時代の特色を明白に示してゐる。

しかし、徒らに嚴肅なるべく、眞面目なるべく、世は容さない。生活に緊張味がいよ〳〵加はり、社會組織の缺陷から來る壓迫が益甚しくなると、反對に、それを融和し、緩和すべく、滑稽突梯は必要となつて來る。かく意識した上のそれらは、平安朝の末期頃から、增加して來た。故に今昔物語のそれらの說話を登載してゐることは、他よりも多い。この流れが、また本書に入つて、笑の興味を湧涌せしめてゐる。

本書は大體以上の樣な說話の記載から成立つてゐる。乃ち日本文學の精髓と考へられた歌に關する傳說、神よりも佛を主とした宗教に關する傳說、征服の快感を多分に味はしめる英雄に關する傳說、微笑を禁ぜぬ無邪氣な童話、これらに纏はつてゐる敎化訓練の意義、滑稽突梯の趣味、かくの如きものは、すでに今昔物語にあつたのである。その分量は、もとより異なり、かれに多い支那傳說のこれに少ない如き差異はあるが、大體これはかれの追隨であり、摸倣である。

本書は以上の如く、今昔物語の後身とも云ふべきものである。後身といふのは、普通、名と質とを異にしながら、甚しくその思想と傾向とを一にして居るの意である。これはそれに過ぎて、

前者の殆んどその儘を踏襲してゐる個處があまたある。例を擧げるには、餘りに多過ぎる。その數のみを云ふと、本書中で、今昔物語と同一な說話の數は、大體八十餘ある。而して本書全體の說話は、百九十六あるのであるから、その約半數は、悉く前者のまゝである。しかもそれが、語句の多分の變換のみの差異を持つてゐるのみで、說話の根本は全く同一である。かくの如きは、抑何の故であらうか。これは時代によつて、文體に對する時人の觀念が、變化したためである。それに關して、まづ考ふべきは、本書が、何時作られたかと云ふ事である。

今昔物語に後れて、本書が出たといふ事を、すでに云つた。この事は、明白な事實で、今更說明する要はないのであるが、論理上の順序としては、まづそれから云はねばならぬ。

今昔物語は、その製作の年時は詳にし得ない。併し、藤岡作太郎先生は、康平の終頃とせられてゐる。書中には、橘季通が康平三年に卒してゐるのを、「只今有る。」と書いてあり、康平五年に平定した前九年の役が記してあり、その一部將の宗任が、筑紫にある事まで述べてある。勿論その以後の寛治年間の、後三年の役の事まで（目錄のみ）あるから、詳にすることは出來ぬが、大體、康平、承保の間に成つたものとも云へるし、或は完成はその以後とも解せられるのである。そは、後に讓つて、こゝには、これが院政頃の大編纂書であることのみに留めておく。

本書は、今昔物語と同じく、その著作の年月は明らかにし難い。しかし、佐藤誠實博士の研究によると、巻十に、「堀河院明暹に笛ふかさせたまふ事。」の條に、院が明暹の笛を御感あつて、御笛を賜はつた。その終に、「件の笛傳はりて、今八幡別當幸清が許にありとか。」とあつて、その細註に、「件笛幸清進上當今、建保三年也。」とある。この「當今」とあるのは、順德天皇である。更に、巻八に、「東大寺華嚴會の事」の條に、鯖を賣る翁が、杖を持つて鯖を荷ふ。而して、「件の杖の木、大佛殿の内、東廻廊の前に突き立つ……かの鯖の杖の木、三十四年がさきまでは、葉は青くて榮えたり。その後猶枯木にて立てりしが、この度、平家の炎上に燒け終りぬ。」とある。この東大寺を平重衡が燒いたのは、治承四年の事である。これを今昔物語には、「其の鯖荷ひたりける杖、今に御堂の東の方の庭にあり。其の長增ることなく、また榮えずして、常に枯れたる相にてあり。」とあるによつて見ると、本書のは、もとその木の榮えずして、枯木のやうで立つてゐたといふ意味に書いたのを、寫し誤りなどしたのであらう。三四十年などおほやうに云はず、三十四年とはつきり云つてあるのも、炎上の時を指すやうに思はれる。治承四年から三十四年の後は、前記の石清水別當幸清が、笛を進獻した建保三年の翌年で、建保四年である。これによつて見ると、この書は、建保年間の作であらうと云ふのである。

以上の論證は、確乎たるべく見えるのではあるが、二行の細註は、本書には唯これのみで、他と體裁を異にしてゐるから、編者以外の人の插入とも見えるのである。かりに、これを除いて、たゞ幸清のみを考へてみると、この人は、建久の終に別當になつてゐる。故に、笛の獻上は、その後の事とならねばならぬ。必ずしも、建保三年とは限られない。鯖の杖の平家の兵火に燒けたのが、治承四年であるのは事實であらうが、炎上から三十四年後が、今といふのでは、文意に違ふ。著者の執筆の今日から遡つて三十四年前までは、葉の榮えたといふのである。これを博士のいふが如く、榮えずしてあつたといふ誤寫としても、三十四年前には、枯木のやうで、確かに存在したのである。それが、その後の治承四年に燒け失はれたといふのである。「この度」といふ語は治承四年のみではあるまい。その附近をいふとも解せられるのである。これは坂井衡平氏も、極力論ぜられてゐるが、確かにさう見るべきである。これによれば、前證は、建久以後のそれとなり、後者は、治承四年附近を示すのみとなるのである。

佐藤博士は、猶この書の十二卷に、後鳥羽院の御時に、水無瀨殿に夜々光物が出るといふ事があるのを引いて、この後鳥羽院と申し上げるのは、後嵯峨天皇の仁治三年からの事である。何となれば、この院は、四條天皇の延應元年に崩御せられたので、顯德院と申し奉つた。それを仁治

三年に、後鳥羽院と申し上げることとなつたのである。この御名があるのを見ると、この書は、仁治三年以後の著作となるのである。これでは、あまりに後になり過ぎて、前に述べた建保四年よりも、二十六年後にもなるのである。故に、この「後鳥羽院」といふのは、もと「本院」とあつたのを後にわかりいいやうに、かく改書したのであらう。本書には、建保四年から仁治三年まで、二十六年間の記事は、いさゝかも交つてゐない。從つて突然に、二十餘年後のものが交つてゐるべき譯がない、と云はれてゐる。この博士の言は、確かにさうであらう。博士が大事として引かれた前の二證の、やゝ不確實なものよりも、この事の方が、卻つて正確に近い價値があるのではあるまいか。後鳥羽院が水無瀨殿に御幸があつて、「暫可爲御所。」と百練抄にあるのは、建仁三年正月の事である。故に、これのみによると、建仁三年以後の編著ともなるであらう。本書に多く引用してゐると考へられる古事談は、建暦二年までの記事がある。これによれば、本書は又建暦二年後のものとも云はれるであらう。併し、古事談も、一時に書かれたものでない事は、猶本書と同一であるであらう。しか考へると、本書は、大體治承附近から書き出し、建暦附近までに至つて書き終つたと云ふべきものかと思はれる。しかし、この年次は、あまりに長い。もし建暦の記事を追記ともすれば、この範圍はよほど縮少せらるべきであるが、これも今日では明らか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にし難い。

本書は、上述の如き年代に作られたものであるが、この時代は、鎌倉幕府時代の初期で、武家が強く、公家が弱く、從來政治と文學とともに握つて、社會的に、精神的に、最高の位置を占めてゐた公卿大夫は、悉く政權を奪はれたので、からうじて文學の一方面のみを保つて、閑暇にまかせて、その勞作を事としてゐた。それも長大なものは、氣力さへも奪はれたものの堪ふるところでない。簡短で、輕便なものが、從つて專ら作られた。すなはち散文は多く作られずして、短歌が著しく研鑽せられた。このゆゑに、短歌としての技巧は著しく進歩して、新古今集の歌の如き、歌として飽滿な内容と、修辭とを持つものさへも出來上つた。勿論、公卿以外の人々が、佛教思想を基礎として、種々の大作をしたことは軍記物語、その他に見えるのであるが、これは、新興の氣運に乘じた一種特別の文學であつて、平安朝のそれとは大いに異なつたものである。公卿はいふまでもなく平安朝の盛時を追慕してゐる。寛弘附近は、平安朝の末期に於いても、すでに理想の時代と見なされてゐた。この時の雄篇大作に摸倣したもののみの多く出たことでも、これを證してゐる。この傾向は、公卿が政權を失つて拱手の時間が增すほど、強くなつてゐる。これと反して、時代の新人は、早くも新趨勢を迎へてすでに舊文學に黨しない。一代の思想の潑剌

たるものを載せた新文學の盛時は來てゐる。公卿はもとより舊文學の持主である。自分らの一黨から、平安朝の大作を出したのである。その自分らの文學が、時と合はない原因は熟知してゐても、それから離れ難いのは人情である。故にこの間に於いて、歌以外で、同系統たるべき諸作をもしたのであるが、既に創作力さへも乏しくなつてゐるのであるから、僅かに自己の經歷を本とした紀行等に、些かの技倆を示すのみである。かくの如き有樣になると、只管に戀しいのは過去である。平安朝の盛時である。この時の作物を玩讀するのは、自己慰藉の最良方法である。しかしそれのみでは滿足せられない。その眞味を他人にも傳へて、過去の憧憬を共にせしめようとするに到る。この故に、講說も、註釋も生じて來た。

かくの如き過去の憧憬は、過去の說話の反覆をも生じた。そのあるものは、備忘の資に供しようとしたのであらうが、それよりも他人とともに、過去を味はうとする企圖に發したのが多數であらう。前出の書にあるものは、それを讀破すれば、すでに十分である。しかるを、更にこゝに再說しようとするのは、解するに苦しむ次第であるが、憧憬の念は遂にかくの如くにまで到らしめたのである。それに加ふるに、文體上の不滿が、過去のそれにある。それを改作して自己の惝恍する時代のそれと、成るべく一致せしめようとした。この一事は看過する譯にはゆかないと思

ふ。

平安朝末期及び以前の文體は、物語系のものが發達して、その絶巓に達した後を承けたのであるから、諸種の續出した物語、何れもそれを使用してゐるが、徒らに流暢、優雅ならんとして、語句を長くし、助辭、助動詞を猥りに多くしてゐる。すでに妙味を失つては居るが、いづれも、苦心刻意の作であつて、多くの時日を費したものである。これを繼承し、それに終始するのは、何人も堪へ得るところでない。匆々筆を運んで、必要の外、特別の修飾もせず、技巧も加へざる事、恰も當時の公卿の日記の如き文體が、一方に起つてくるのは當然であらねばならぬ。乃ちここに技巧的描寫に對して、無技巧的描寫の存在する事となつたのである。この無技巧的描寫の代表として見るべきものは、今昔物語である。この後者は、情緒の纏綿たる物語を書くには勿論適せぬが、種々の傳說、童話等の類を、急遽に雜載するには、極めて適當である。而して、この傳說、童話類の輯錄は、すでに云つた如く、創作力の缺乏した時代に於いて、更に過去の憧憬の盛んになつた時代にあつて、必ず大いに起るべき事業である。故に、これに從事する幾多の人を生じたのであるが、その文體の、たゞ無技巧的であるのは、すでに飽かぬところである。憧憬する過去を表現してゐる文體は、皆技巧に滿ちたもので、これから起し來る情緒は、眞に忘れ難く、

離れ難いものである。そのゆゑに、無技巧的でありながら、技巧的傾向を表現すべき一種交錯した文體を用ゐることを創めて來た。これが乃ち本書の用ゐた文體である。

今昔物語とこの物語と同一説話を取り扱つたものに就いて見ると、前者で、語句の短くして、意義を盡さざるものを、後者では長くして、情趣を饒かにせんとし、また前者で彼是混合したものを、後者では分解して秩序的に述べる事をもした。而して、これによつて、無技巧的傾向と、技巧的傾向とが、適當に按排せられ、調和せられてゐる。唯その爲に、前者の、率直單純で、虛飾がなくして、穉氣野氣愛すべきものが、迂餘曲折して、聊か匠氣衒氣を生じたといふ缺點も出來てゐるのであるが、悠揚典雅の趣は別に加はつてゐる。その例を一二擧げると、今昔物語「兵衞佐上綏主於西八條見得銀語」に、「今昔兵衞佐□□トイフ人有ケリ。……石ヲ以テ此居タル石ヲ手口ニ扣キ居タレバ、被打テ窪ミタル所ヲ見ルニ、銀ニコソ有ケレト見ツレバ、剝タル所ニ土ヲ塗リ隱シテ……」とあるのは、意義徹底しないものがある。結末を述べるのに急に過ぎてゐる。これを本書には、「……この石を手まさぐりに叩き居たれば、打たれて窪みたるところを見れば、金色になりぬ。希有の事かなと思ひて、剝げたるところに土をぬりかくして……」と改作してゐる。これで石の光がさやかに見えるやうになつた。しかも銀ではまた貴さが足りない。一躍して

金に上せて上綏の主の以後の活躍の資力を大にして見せてゐる。また今昔物語、「河内禪師牛爲靈被借語」の、「……其ノ牛ヲ勞リ飼ケル程ニ、何シテ失タリトモ无クテ其ノ牛失セニケリ。河内禪師、此ハ何ナル事ゾトテ求メ騷ケレドモ无ケレバ、求メ繚テ有ル程ニ、」とあるのは、簡で要を得ては居るが、牛を失つた人の失望を十分に現はしてはゐない。これを本書には、「この牛をいたはり飼ふほどに、この牛如何にして失せたるにかといふ事なくて失せにけり。こは如何なる事ぞとて覓め騷げどもなし。離れて出でたるかとて、近くより遠くまで、尋ねもとめさすれども、無ければ、いみじかりつる牛を失ひつると歎くほどに、」と改作して、意義の周匝を得るやうにしてゐる。勿論これは委曲に過ぎてゐるやうであるが、物語系の文としては、この方が優つてゐると思はれる。更にそれにつゞけて、今昔物語、「……其ノ後其ノ夢ニ見エテ、六日ト云フ巳ノ時許ニ、此ノ牛俄ニ何コヨリ來リトモ无クテ歩ビ入タリ。此ノ牛極メテ大事シタル氣ニテゾ來リケル。……佐大夫ガ靈ノ其時ニ行會テ、力強キ牛カナト見テ借テ乘テ行ケルニヤ有ケム。此ハ河内禪師ガ語リシ也。此レ極メテ怖シキコト也トナム語リ傳ヘタルトヤ。」とあるのも、例の單純味はあるが事理に盡さぬ所がある。これを本書に、「六日といふ巳の時ばかりに、そゞろにこの牛歩み入りたりけるが、いみじく大事したりげにて、苦しげに舌を垂れ、汗水にてぞ入りたりける。……牛は

とまりたりける折などに行き合ひて、力強き牛かなと見て、借りて乘りてありきけるにやありけんと思ひけるもおそろしかりけりと、河内前司かたりしなり。」と改作して重複を省き、しかも周到味を加へて完全に近いものとしてゐる。

以上は主として、語句の不足を補つたのを述べたのであるが、完全した語句を前後し、或は組織を變換して、意義の明晰を期することもしてゐる。このために、例の重複が減じて、却つて單純化したところさへもある。繁雜をおそれて例を一つ擧げて見ると、今昔物語「極樂寺僧誦仁王經施靈驗語」に、「今昔、極樂寺ト云フ寺有リ。其ノ寺ニ□ト云フ僧住ケリ。此ノ寺ハ、堀河ノ太政大臣ト申ス人ノ造リ給ヘル寺也。而ルニ、其ノ太政大臣ノ御名ヲバ基經ト申ス。身ニ熱病ヲ受ク、日來重ク惱ミ煩ヒ給ヒケレバ、方々ノ御祈共有リ。就中、靈驗有テ貴キ思エ有ル僧共ハ、不參ヌ无ク參集テ、祈トシテ无キコトハ无シ。其レニ、此ノ極樂寺ノ僧ハ、世ニ貴キ思エモ无ケレバ、此許ノ御祈共ニ召シモ无シ。」とあるのを、本書には、敍述の順序を變へて、「これも今は昔、堀川太政大臣と申す人、世心地大事に煩ひ給ふ。御祈どもさまざまにせらる。世にある僧どもの參らぬはなし。かく參り集ひて、御祈どもをす。殿中、騷ぐ事かぎりなし。こゝに極樂寺は、殿の造り給へる寺なり。その寺に住みける僧ども、御祈せよといふ仰せもなかりければ、人も召さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com